（JICA森林専門家による）

カーボンクレジット概説

2025年3月

コンゴ民主共和国 JICA政策アドバイザー
（森林・気候変動対策）

大仲 幸作

REDD＋

（途上国における森林減少・劣化に由来する排出の削減等）

- 農地拡大や木材生産等で減少・劣化し続けている途上国森林(熱帯林)の保全を通じてCO2排出を削減。
- 保全対策を行わない場合の森林減少・劣化の進行を予測して「ベースライン」を設定し、保全対策による成果（削減量/カーボンクレジット発行量）を決定。
- 活動スケールの違いによって差別化。

① プロジェクトレベルのREDD+

② Jurisdictional /国・州レベルのREDD+ (J REDD+)

なぜ「森から世界を変えるプラットフォーム」でカーボンクレジットを取り上げて、JICA森林専門家がそれを概説するのか？

- 自然環境保全セクターにおける慢性的且つ深刻な資金不足。
  →民間資金動員への期待。
- 森林系クレジットは最もメジャーなカテゴリーの一つ。
- 今、カーボンクレジットを巡って発生している諸問題は主にREDD+など森林系クレジットであることに由来。

本日の発表
（森林クレジット/REDD+にフォーカスしつつ）

1. カーボンクレジットの基礎知識
2. カーボンクレジットの最新動向：データ編
3. カーボンクレジットの最新動向：政策編
4. 今後の課題

１．カーボンクレジットの基礎知識

- 質（環境十全性：Environmental Integrity）の確保。
- 国家や企業などが排出削減目標/ネットゼロを達成するための「オフセット」で主に利用。
- カーボンクレジットの種類：
  ① 回避・削減（Avoidance）と吸収・貯留（Removal）
  ② 自然系と技術系
- 様々なカーボンクレジット認証機関
  →自然系クレジットの扱い、特にREDD+クレジットの方法論に注目。
- カーボンクレジット市場/需要：コンプライアンスとボランタリー
  →コンプライアンス下の自然系カーボンクレジット利用に注目。

２．ボランタリーカーボンクレジットの最新動向：データ編

- 市場規模(取引量)は2021年にピークを迎えた後、減少傾向。
- クレジットは９割がAvoidance、１割がRemoval(ほとんどが自然ベース)。
- 自然ベースと再エネで約６割でクッキングストーブが約１割。
- 自然ベースではREDD+が全体の約８割。
- 認証機関はVERRAが未だに最大手であるものの、そのシェアは減少傾向。

３．カーボンクレジットの最新動向：政策編

１）クレジット需要の創出

- Science Based Target initiative(SBTi)における議論：Scope３(サプライチェーンや製品ライフサイクル関連排出)におけるオフセットの是非。
- CORSIA(国際航空機関の下で定められた国際航空業界向けカーボンオフセット制度)の本格化。

２）ボランタリークレジットの質の向上

- ICVCM（カーボンクレジットの評価基準「Core Carbon Principle」の設定・運用機関）がVERRA及びARTのREDD+方法論を全て承認

３）REDD＋クレジットの再起

- ART/TREEの加速化：J REDD+の主流化とクレジット供給拡大

４．今後の課題

１）政策レベルの課題

- 対地域住民/原住民（地域住民の権利保護・直接的支援）
- 対アフリカ支援（ART/JREDD+に係る民間投資の地域格差是正）

２）２つの予測・コントロール不能な課題

- 米トランプ政権のインパクト→民間セクターも含めて全地球規模で波及。
- 気候変動の急速な進行→パリ協定「1.5℃目標」（2030年45%
- 削減、2050年ネットゼロ）の形骸化。

今こそ、気候変動対策、そして自然環境保全！

ご清聴ありがとうございました！